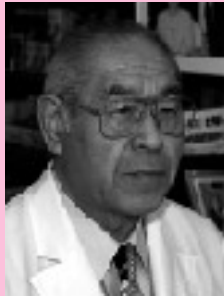


先人の魂を畏敬して 田代三喜ゆかりの薬局



増田 武さん
(本町三丁目・71歳)

加持祈禱やまじないなどが医療の中心だった室町時代後半。中国の明に渡り当時としては最先端の医療を日本に伝えた人物がいます。その人の名は田代三喜。三喜は、足利学校で学んだのち、遣明船で明に渡り最新の医学と薬学を身につけました。帰国後、一時鎌倉の円覚寺に住し、その後足利学校で教鞭をとりましたが、古河公方足利成氏に招かれ、古河に移り住みました。その後医者として一般の民衆、公家、武家を問わず診察、治療にあたり世の人々に医聖と仰がれるようになりました。

この三喜の名を冠した薬局が「増田三喜堂薬局」です。薬剤師の増田武さんに三喜にまつわる話を伺いました。

田代三喜は、日本の医学史に残る偉人であり、当店が三喜の名前を屋号に使っていることは大変恐れ

ぶんがくかん発
Vol.177

う つば かいこう 空穂との邂逅

夢破れざりしかども…

明治28年、念願叶って東京専門学校（現早稲田大学）文学科に入学を果たした鷹見久太郎は、ここで一人の青年と出会います。この青年との出会いが後の久太郎の人生を決定づけたといっても過言ではありません。その青年の名は窪田通治、歌人・国文学者として優れた業績を残した窪田空穂その人です。

久太郎と空穂はよほど、気があったのでしょうか。

空穂が古河を訪れ久太郎宅に滞在したこともありました。また、久太郎の日記にも、空穂がたびたび登場します。写真をご覧ください。この日記は専門学校在学中に書かれたものと思われませんが、空穂との同居の様子が記されています。

「君に兼々聴かうと思つて居た事があるが、と濁水（窪田氏）八僕の顔をじろりと見た。何に？と言へば、君の此家に越して来た時に御互に期う一處に居るからには凡ての秘密を語つて益々交誼（つき合い）を堅くし様つて何時だったか夜の更くるも・・・」

意気揚々と学生生活を送るはずの二人でしたが、その生活は長くは続きませんでした。久太郎は入学の翌年に退学・・・家長としての立場を優

先せざるを得なかったのです。空穂もまた、家の事情で一旦退学し、郷里に戻ったのでありました。

しかしながら、二人の文学への思いは尽きませんでした。お互いに励ましあいながら『明星』『小柴舟』などの雑誌に投稿、二人の作品が同時掲載されたこともしばしばありました。

その後、空穂は東京に戻って復学、中央文壇にいち早く復帰しますが、久太郎は郷里・古河で、

「東京へ出たい」という思いに駆られていました。そして、ついにその思いを果たす時がきます。しかしそれは「文学者として世に出る」という夢を果たすこととは、ちょっと違っていました。

久太郎が近事画報社に入社したのは明治39年、空穂の紹介によるものです。文学青年・鷹見思水は編集者・鷹見久太郎としての道を選んだのです。

若き日の夢は破れましたが、編集者としての久太郎は文学史上に、「コドモノクニ」という輝かしい業績を残しました。空穂との出会いがなければ「コドモノクニ」も生まれなかったかもしれません。その意味で、久太郎と空穂との邂逅は、文学史上の大きな出来事であったといえましょう。（文人・鷹見久太郎展は2/26まで開催）



鷹見久太郎「うきくさの日記」(左と空穂宛のはがき)